

A-Lab Artist Talk

アーティスト トーク

出演 ヤマガミ ユキヒロ、小出 麻代、田中 健作
司会 都市魅力創造発信課長 松長
日時 平成27年12月5日(土)／午後2時から午後4時
場所 あまらぶアートラボ(A-Lab ロビー)



ヤマガミ ユキヒロさん(以下 ヤマガミ) 私の作品は room1 と和室に、絵画に動画を映した作品を展示しています。このようなアート施設が新しくオープンするのは嬉しいことで、市民にとって初めは何をやっているのかわからなくても、いい試みですので、続けて欲しいと思います。第1回目の展覧会に参加できて光栄です。

このような場所は美術館よりもハードルが低く、ギャラリーよりもパブリックで親しみやすいです。ギャラリーでトークをする時は、アート関係者が多いのですが、アートラボは近所の人がふらっと入ってこられるのでアーティストとしても試されていると感じます。近所の人が散歩がてら来る場所、そういう人に見てもらうのは大切な事です。「ピカソやゴッホなら知っているけど、絵のことは分からない」という方に、最初に現代アートに触れる場所であって欲しいと思います。

これから1年かけて尼崎の人に作品を見てもらいながら、いろんなことに挑戦したいと思います。プレッシャーもあります。分かるとか分からないというより、現代アートをカッコいいと感じてもらえたら。美術館よりもパブリックな場所でごそ取り組んで行きたいと思います。

今日は、今回展示している作品の紹介とこれから1年間かけて取り組んでいくプロジェクトのプランをお話したいと思っています。僕はキャンバスの上に映像を映すキャンバス・プロジェクションという手法を使って、動く絵画を制作しています。ほとんどがモノクロで、鉛筆や墨で制作しています。絵を描いたときと同じ目線で撮影した映像を映します。

(SAKURA スケープ)

時間が流れているのを1枚の絵に表したかったので。映像ならそれが可能であるので、組み合わせてみようと思いました。絵画では光そのものは描けません。絵の具では光を「光っているよう」にしか描けないのです。僕にとって映像は「光」を描く鉛筆のようなものです。

和室に展示している「SAKURA スケープ」は、毎朝、雨だろうが風だろうが3ヶ月ほど撮影に行き制作しました。当時は会社員だったので会社に行く前に撮影していました。桜が咲いて散るまで記録できたから、撮影は終わったのですが、習慣は怖いものでその後もいつも同じ時間に行っていました。桜が散ると葉桜になるのがきれいでした。桜は花が散れば終わりだと思っていたのですが、葉桜もきれいで、夏の新緑もきれいで、秋にさしかかって紅葉が切なくて、結局1年間撮り続けました。今回展示しているものは、散って終わりなのですが、その後も作品にしたいと思い、秋バージョンの作品を作りました。

作品は細かく、見えているところは全部描いていません。枯れ木は割といい感じに描けていると思います。しかし、葉っぱが茂るとワケがわかりません。細かく描ききれずに、途方にくれました。

お茶室に絵を描きたいと思い、掛け軸にしました。展示会のときに元々掛かってある掛け軸を書き替えられたらと思っていました。

(新宿の風景)

まちに車や人が通っている映像。私がよく描くタッチの作品です。いわゆるまちの風景、絵にした事が無いところを選んでいきます。まちは無人になる状態はなく、かならずどこかに車や人がいます。その場所で起こった変化を記録していきました。長期間、日をまたいで撮影することもありました。キャンバスの中で「黄色の何か描きたいな」と思ったら、「黄色い服を着た人」が通るまで待つ。非常に時間がかかり、素材も多くなります。1日中同じ場所にいるので、いろんな人に声をかけられました。

同じ新宿でも繁華街では遊びに来ている人がいるので、画面に向かって「イエーイ!」と絡まれる事が多かったです。しかし、新宿のガード下は通勤路なので、同じ時間に同じビジネスマンが通ることが多かった。すると、ある人が私のことを覚えてくれていました。何をしているかわからない人が朝も夜も次の日も同じ場所にいる。

興味が湧いたのでしょね、次の日もいたら話しかけてみようと思ったそうです。その人がまちを撮影している私のことを写真に撮ってツイッターにあげていました。

こうして今までアートに興味なかった人につながりが持てました。ドローイングを見せた後、普段通っている新宿のまちの見方が変わり、新宿のまちから空を見上げるようになったそうです。東京で開催された私の個展にも来てくれました。自分の中で興味が湧いたアート展に行くようになったそうです。

(六甲山からの風景)

関西圏の人なら1度は六甲山からの風景や夜景を見たことがあるのではないのでしょうか。しかし、早朝の風景は見た事ありますか？ この作品のクライマックスは早朝の風景です。なので朝日が出る東向きに描いています。麓では晴れていても、霧や山頂の湿度の違いで朝日が見えないこともあります。

六甲山に勤めるスタッフに撮影するなら寒い朝が良いと言われました。私に靈感はありませんが、友人には夜の六甲は止めた方が言われた事も。正直、ビビりましたね。幽霊よりも地元のヤンキーの方に気を付けるとも言われました。

ある9月に4時40分の日の出を撮影しに、3時30分に山頂へ行ったときの事です。ヤンキーが遠くで騒いでいたのですが、ここまで来てビビってもしようがないと思い、端の方でひっそりと撮影を始めました。あまりの



ヤマガミ ユキヒロさん

寒さに梱包用のプチプチを巻き、微動だにしませんでした。するとヤンキーの「ぎゃー」って声が聞こえ逃げ帰っているのが見えました。早朝の山頂に微動だにしない半透明の何かがある。それは驚いたでしょね、幽霊の正体なんてそんなもんです。

(今後のプロジェクトについて)

何ができるかを考えていたのですが、まちを俯瞰したものを尼崎でやろうと思っています。プラス前々からやろうと思っていた事を。下絵を描くときに線描で描いて行こうと思っています。これがなかなか難しくこれまでにポツになった作品もあります。山手線のホームを描いた作品では、撮影後すぐに工事が始まり、撮影していた場所に乗り換え通路につながる階段ができてしまって、撮影できなくなったこともありました。

ドローイングする前にはまずロケハンします。とりあえず歩いて、いいなと思ったところに目星を付けて、風光明媚なところを選びます。グーグルで検索したら何でも出てきますが、誰でも知っているところはおもしろくありません。

佐賀県の武雄市にある楼門を描いたときから、楼門の設計者である辰野金吾さんの建築をやろうと思いました。東京駅も辰野金吾の作品なんですよ。佐賀でもこんなエピソードがあって、撮影を始めてからしばらくして、撮影していた場所に怖そうな黒塗りの車が止まっていました。3日くらい撮影ができずに困っていると、撮影中に仲良くなった地元の人が車の持ち主を探してくれて、移動してくれたのです。他にも佐賀県のいいところも教えてくれました。地元の人ならではのステキな風景にも出会いました。尼崎でもそんなことをしたいと思います。何か地元の人から情報を得て、地元の人と絡んで、作品を作っていきたいです。もし尼崎にお住まいの方でここが名所だと思えば教えていただきたいと思います。

松長 面白いと思います。市のひとつの事業として取り組めたらいいですね。

ヤマガミ 必ずしもその作品を作るかは分からないで

すが、一見おもしろそうでないところでもきれいな風景に出会える場所を教えてください。信号越しに見える六甲山なんていうのも面白いかもしれません。

小出 麻代さん(以下 小出) 私は倉庫とベランダと和室で、作品を制作しました。小さなパーツを組み合わせて作品にしていけるのですが、展示空間そのものが持つ色々な要素も作品に取り込みたいと考えています。例えば、その空間に窓があれば、日光の動きや外の景色の事も踏まえて制作します。

倉庫の作品は、初めてA-Labに下見に来た時に、すぐにここを使いたいとお願いしました。

松長 倉庫は即決で決まりましたね。倉庫にあった棚や荷物をすべて出しました。きつと何かを感じていらっしやるなと思いました。

小出 真っ暗な場所を使った作品制作を考えていた時だったので。カラーセロファンを何枚も重ねたものを、床に置いています。懐中電灯と明滅する電球によって、セロファンの色や影が見えてきたり、消えていたりするという作品です。これは、車に乗っていた時に見た光景が元になっています。真夜中、暗すぎて全く何も見えない中、ヘッドライトが当たる部分だけが瞬見えて、微かに何かがあることだけは分かる。でも、「何だ?」と思ったときには消えてしまって、それが何であるかまでは認識できない。色の残像だけが見える。

和室やベランダは、ときおり真下の保育所や隣の公園から、子供の声が聞こえてきます。遊びの時間やお昼寝の時間、近くの中学校のチャイムや夕飯の支度をする匂い。時計を見なくても時間が分かる、日常のことを感じる、そんな場所だと思ったので、それを感じてもらおうと意図した作品です。



撮影 豊永政史

(左の写真を見て)

小出 2015年の越後妻有アートトリエンナーレで制作した作品の写真です。廃校になった小



小出 麻代さん

な小学校の1階部分の教室、音楽室、和室の3部屋を使用した作品です。実際に自分が現地で見た風景の中で印象的だったものや、地元の方の話を聞いて想像した光景を、学校に眠っていた道具や近くで拾ったものを組み合わせて制作しました。

初めてこの場所に行った時に直感的に感じたことと、通い慣れたからこそ見えてくるもの、色々な視点と距離と時間を持った景色を作ることがこの作品の目標でした。尼崎の個展も、時間がたくさんあるので、じっくり制作できたらいいなと思っています。

松長 制作では一番多くの時間を費やしておられました。関連やつながりを多く意識されています。和室にあるヤマガミさんの作品を見て、急遽ご自身の作品に寒桜を使われたりと、関連をよく考えておられるなど感じました。

田中 健作さん(以下 田中) 生まれも育ちも尼崎の田中です。(先ほどのヤマガミさんが尼崎の名所を教えてくださいとおっしゃってましたが、これを受けて)市民としてオススメするのは8月にある貴布禰神社のだんじりです。狭い場所に3日間だけ、すごい人が集まるんです。見た目は危険なのですが、オススメです。

A-Labが完成し、尼崎のアーティストが作品を発表できる場所ができたのは嬉しいですね。近くに住んでいる

方が「A-Lab のあるまちに住んでるねん」と自慢したり、次の週末に A-Lab に行こうと思ってもらえる場所になりたいと思います。今回の展示もそんな責任を感じています。

小さい頃は戦場カメラマンに憧れて、学生の中から写真を専攻してきました。社会的な事象に興味があって、作品を通して問題提起をしたいと思い、報道分野にも片足をつっこんでいます。報道の世界の内情も知っています。今回の展示では東日本大震災をテーマにしている作品が多くあります。Room3 以外の作品は震災と関連しています。自ら現場に行って五感を通して取材しています。被災地では津波に流された写真アルバムの洗浄作業の現場も見ました。マスメディアの報道から取材するきっかけをもらうことも多くあります。

震災で流された約 25m の浮き桟橋が 3 年後にアメリカ・オレゴン州に漂着したことも取材しました。3 年経ってもまだ震災の影響が続いていると実感しました。現地の上空からヘリで空撮もしました。空から見るアメリカ沿岸部のまちは被災地沿岸部に似ていました。海岸の清掃作業にも同行しました。知り合いもいないので公的なところで相談して、現地で滞在し、自分の作品や取り組みについてもプレゼンテーションをしました。

(2011 年の被災地)

1995 年の阪神大震災のとき、当時小学生だった私



田中 健作さん

はまだ幼くて何もできなかったという記憶が残っています。自分はこのような大きな出来事を語り継ぐ 1 番若い世代だと思いました。何かやっていかなくてはいけないといつも思います。同じ国にある東北と関西でも、被災地の現状は変わりません。現地に行くと阪神大震災の時のイメージとは違うものでした。見た事も無い光景が広がっていました。そこで人が生活していた事も伝わらないような光景でした。Fooling という作品はそんな現地で思い付いた作品です。被災地で自分の足を見たとき、そこに生活していた人たちの痕跡である家の床材が広がっていて、何気ない家の床材が津波でこのようになっていました。床材は素足で接するなめらかな感覚を呼び起こし、生活の営みを象徴的に表すものの一つです。これを見て何か考えるきっかけになればと思います。写真を囲む額は厚い額装にしました。私なりの最大限の敬意です。慎重に扱わなければならないと思っているから。

震災直後の光景も日が経つにつれて変わっていきます。跡形もありません。このような時間の経過を記録することもやっていきたいと思います。room2 の作品は住宅街の跡地を訪ねた 120 軒くらいの記録を流しています。作品に出てきた風景はもう現存しません。刻一刻と変わっていきます。

今後は被災地と尼崎、この 2 つまちの時間経過を感じてもらえるような作品を作りたいと思います。私は現場主義なので、興味のある若い世代の子を被災地へ一緒に連れていくことも、なにかきっかけになるのではないかと思います。写真はその場に行かないと撮れないというプロセスも作品に使っていききたいです。

私は作品を被災地で発表し、実際に被害にあった人に見てもらおうことにしています。実際に被災された方々の感情を受け止めないといけません。対話の中で被災された方々はもっと作品を発表してほしい、風化させてほしくないとおっしゃいます。被害者の感想や話を聞く中で問題提起になる作品を作っていこうと思いました。タイトルにもなっている「まちの中の時間」を聞いたと

きにまず被災地を思い浮かべました。時間が止まってしまったまちと、動き続けているまちを比較した展示をしたいと思ったからです。

room2 の作品はリアルタイムの音を、外に向けた集音マイクで流しています。アトラボは音が特徴的な空間です。下には保育所もあり、子どもが騒ぐ声や学校のチャイム、車のエンジンなど日常に流れる音を感じてほしいです。

room3 の作品は学生の頃にひたすら尼崎を歩いて撮った写真です。そのネガを使った作品で、尼崎のまちは生きている、呼吸している。ということ表現しています。

今も尼崎に住んでいますが、尼崎はまちの風景が多彩でイメージも様々。どこをテーマにしてもおもしろい。そういう要素を持ったまちです。まちの人と一緒に作品を作るようなことをしたい。まちの人と一緒にまちを歩いてみたいと思います。

松長 今回は A-Lab オープンのキックオフイベントとして、来年市制 100 周年を迎えるにあたってテーマを決め、現代アートを身近に感じてもらうおうと思って企画しました。まちとのつながりについてそれぞれ認識を持たれている。ぜひ個展に向けてお願いしたいと思っています。

観客 尼崎の地域性をどう思っていますか。どのようなイメージを持たれていますでしょうか。

ヤマガミ 出身は高槻。近いけど尼崎で降りたことはなかった。工場と淀川というイメージです。思い込み程度の印象しかない。来たときに市役所の屋上に上がったときに遠くには大阪、手前に尼崎の町並みがいい構図だなと思いました。

小出 にぎやかな街という印象があります。今は最初に教えてもらった阪神尼崎から A-Lab への道しか知らないで、色々な場所に行ってみたくと思っています。